

紅白歌合戦に物申す

篠崎 辰夫

昨年暮れの紅白歌合戦の視聴率は、関東地区では前半が 34.7% (前回 37.7%)、後半が 37.3% (前回 41.5%)、関西地区では前半 31.9% (前回 35.2%)、後半 36.2% (前回 40.5%) だったことがわかった。紅白史上最低を更新したらしい。

ネット上では、グループが多すぎる！お祭り騒ぎ過ぎる！芝居コント面白くない！本当の歌が聴きたい！ジャニーズと坂道シリーズの学芸会だ！受信料で何やってるんだ！無駄遣い！史上最低の紅白だった！受信料返せ！・・・と不満続出、厳しい意見が挙がっている。

たしかに、特別企画の名の下に歌と無関係のパフォーマンスが割り込んで、内容が盛りだくさん過ぎる。結果、トータルでの出場者数が増えて 1 曲あたりの時間が短い。多くの歌手に割り当てられた時間が「2 分程度」というのは、歌合戦を掲げる番組としてはあまりにも短く物足りない。2 分だけの歌それぞれに、あれだけの人数、舞台装置、衣装、仕掛け、コスト等を費やして、大いなる受信料の無駄遣いと言われても仕方ないだろう。

例年紅白は、録画してあとから見たいところを見るようにしているが、昨年の紅白は、最初からじっくり見るつもりで臨んだ。最近 TV の歌番組が少ないので、ゆっくり今年流行の歌を聴きながら、カラオケで歌う曲でも選ぼうかと考えた次第。

しかし、ピカピカギャーギャーの光と爆音、過剰なカメラワーク、さらに秒刻みのスケジュールの中、コントあり、VTR あり、ゲストありとせわしく、だんだん嫌気がさしてきた。なんとか前半までは我慢したが、後半は録画にってしまった。

あとからビデオを早送りで聴いてみた。たしかに一人一人のアーティストの実力や楽曲は、選ばれただけあって聴きごたえがある。とくに三浦大知の歌とダンスや MISIA の歌唱は鳥肌が立つほど。石川さゆりの「津軽海峡・冬景色」、坂本冬実の「祝い酒」も存在感があって良かった。懐メロじゃないかといわれるが、いい曲はいつの時代でもいいもの。やはり演歌は落ち着く。もっと演歌・歌謡曲が聴きたい。

大みそかには家族そろって紅白歌合戦を見て、除夜の鐘が鳴って新しい年がやってくる。昔はそれが日本の年越し、紅白はそういう番組だった。娯楽が多様化し、時代の移り変わりとともに皆が紅白を見る時代ではなくなってきたが、それでも今この時代にまだ四割弱の人が見ているということは、まだまだ意味の大きい番組といえよう。

歌は、どんなときでも身近にあって元気が出たり励みになったりするもの。時代が変わり形が変わろうが、「その年に一番ふさわしい歌を聞く」「大晦日に歌を介して 1 年を振り返る」というのが紅白の基本ではないだろうか。このままでは、紅白離れは進むばかりだろう。もっと歌をじっくり聴かせる番組として回帰してもらいたい。

(2020/01/05)